

書評

ぼくとがんの7年



- 著 松永正訓
- 定価 1980 円 (本体 1800 円 + 税)
- 判型 四六判
- 頁数 248
- 発行 医学書院

評者

大阪大学大学院教授・病理学

仲野 徹

マッチョ系(?) 医師の
正しき患者道

闘病記というのは、どのような人がどのような気持ちで読むのだろう。自分が、あるいは親戚や友人が病気になった時に参考にする、あるいは共感を得たいがためにといったところだろうか。しかし、本書はよくある闘病記とは少し違う。より幅広い人たちにとって読む価値のある〈闘病記〉! に仕上がっている。

『こわいもの知らずの病理学講義』(晶文社, 2017) という本でいろいろと書いたためか、がんについての講演を依頼されることがよくある。その時、本にも書いた次の二点を伝えることにしている。がんが診断されると、妙に悲観的に、あるいは楽観的になりすぎてしまうから、そうなる前にきちんとした知識を頭に入れておいてほしい。その上で、いざとなったらどうするかを考え、周囲の人と話し、ある程度の覚悟を持っておいてほしい。そして最後にこう付け加える。

「でも、いざという時には考え方が変わるかもしれません。それはそれでかまいませんから」と。だが、この本を読んで、どうやら思い違いをしていたことが分かった。考え方が「変わるかもしれませんが」ではなくて、「きっと変わるに違いありません」が正しそうだ。

著者の松永^{ただし}正訓先生は、千葉市で小児科・小児外科のクリニックを開業されている小児外科出身の医師である。同時に、小学館ノンフィクション大賞を2013年に受賞した『運命の子トリソミー：短命という定めの子を授かった家族の物語』(小学館, 2013)をはじめ、これまでに10冊以上の本を出しておられる文筆家でもある。その何冊かを讀ませてもらったが、どれもすごく面白い。

医学生から大学院生時代を描いた『どんじり医』(CCCメディアハウス, 2020)は、同世代としてすごく懐かし、ある雑誌で簡単に紹介させてもらった。そんなこんなでFacebookでのつながりもある。

お目にかかったことはないのだが、ラグビー部のご出身だし、マッチョ系の印象を持っていた。間違えていたら叱られそうだが、今でも、そのイメージは変わっていない。が、この闘病記だけを讀んでそう思われる人は少ないだろう。

血尿を初期症状に膀胱がん(尿路上皮がん)と診断され、治療を受け続けられた7年間の記録である。経過は思い通りではなかったが、最悪でもなかった。その間、一喜一憂し、考えては悩んでを繰り返す。治療による身体の苦痛だけでなく、再発時に襲ってきた死の恐怖や魂の痛みなど、患者にならなければ分かりえなかったことがたくさんあった。

もともと小児がんの専門家なのだから、がんについての知識は十分にある。それに、これまでの著書からうかがえるように患者さんやご家族の内面を深く理解してこられた先生だ。そんな先生ですら、がんになる前の経験と思索では不十分だった。考えてみれば、人間というのはその程度のものなのだろう。前もって頭だけで全てが分かれば苦労はしない。

この本の何より素晴らしいのは、客観的だけでなく主観的にも、患者として経験したことが極めて詳細に、そして正確に記述されているところだ。もちろん医師としての知識と経験のなせる技ではあるが、それはあくまでも背景にすぎない。弱音や医療に対する不満もたっぷり書いてある。それに、家では看護師である妻に泣きを入れる夫であるけれど、病院では主治医に対して臆せずしっかり物申す患者でもある。感情と理性、両者の軌跡が人間的ですごくいい。これぞ〈正しき患者道〉とでも呼ぶべきものではないかという気すらした。

医師は言うに及ばず多くの方にとって間違いなく有益な一冊、書店で闘病記の棚や医療のコーナーに押し込めておくにはもったいなさすぎる。